医学部・病院・医学研究科 新執行部発足

医学部、慶應義塾大学病院、大学院医学研究科において新しい執行部が発足しました。新執行部の体制を紹介するとともに、医学部長、病院長、医学研究科委員長の就任挨拶を掲載します。

病院

副病院長
（システム情報、AIホスピタル構想推進、バイオバンク、予防医療センター移転・拡張事業）
放射線科学（診断）教室 教授
陣崎 雅弘（66回）

副病院長
（医療安全管理責任者、病院運営（入院・手術））
外科学（心臓血管）教室 教授
志水 秀行（65回）

副病院長
（臨床研究推進・支援）
小児科学教室 教授
長谷川 奉延（63相当）

副病院長
（医療連携、病床稼動管理、医療材料最適化、病院機能評価）
泌尿器科学教室 教授
大家 基嗣（66回）

病院長
整形外科学教室 教授
松本 守雄（65回）

病院長補佐
（医療連携、医師働き方改革）
外科学（呼吸器）教室 専任講師
朝倉 啓介（81回）

病院長補佐
（医療安全、病院機能評価）
医学部 准教授
藤澤 大介（77回）

病院長補佐
（臨床研究推進・支援、男女共同参画）
内科学（リウマチ・膠原病）教室 教授
金子 祐子（76回）

副病院長
（病院運営（救急）、BCP、国際対応）
救急医学教室 教授
佐々木 淳一（68回）

副病院長
（病院運営（外来）、患者サービス、広報、医師働き方改革）
内科学（呼吸器）教室 教授
福永 興壱（73回）

医学部

副医学部長
（産学連携・イノベーション）
整形外科学教室 教授
中村 雅也（66回）

副医学部長
（研究）
分子生物学教室 教授
塩見 春彦（61相当）

副医学部長
（筆頭、総務、倫理、学部連携）
衛生学公衆衛生学教室 教授
武林 亨（68回）

医学部長
内科学（消化器）教室 教授
金井 隆典（67回）

副医学部長
（若手人材育成、大学院連携）
解剖学教室 教授
久保田 義顕（79回）

副医学部長
（国際連携、男女共同参画、バイオバンク）
病理学教室 教授
金井 弥栄（68回）

副医学部長
（教育）
医学教育統轄センター 教授
門川 俊明（70回）

副医学部長
（広報、医学部病院連携）
歯科・口腔外科学教室 教授
中川 種昭（64相当）

医学研究科

医学研究科委員長補佐
（博士課程）
坂口光洋記念講座オルガノイド医学教室 教授
佐藤 俊朗（76回）

医学研究科委員長
生理学教室 教授
柚﨑 通介（64相当）

慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

三四会ホームページ

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第26回慶應医学賞

慶應医学賞は、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰するもので、1996年より47名の研究者に授与しています。26回目を迎えた今年の慶應医学賞受賞者は濡木理博士（東京大学大学院理学系研究科教授）、Katalin Karikó博士（ペンシルベニア大学客員教授／BioNTech SE社上席副社長）の2名に決定し、慶應医学賞審査委員会は下記のとおり授賞理由を発表しました。

本賞は、世界十数カ国の著名な研究者および研究機関から推薦された候補者の中から、学内外約90名の審査員による厳正な審査を経て、受賞者を決定しています。受賞者には賞状とメダルおよび賞金が贈呈されます。

関連イベントの詳細は、決定次第「慶應医学賞」Webサイトに順次掲載いたします。
URL：https://www.ms-fund.keio.ac.jp/en/prize/

第26回慶應医学賞審査委員：【塩見春彦（委員長・慶應義塾大学医学部分子生物学教授）、有田誠（慶應義塾大学薬学部代謝生理化学教授）、岡野栄之（慶應義塾大学医学部生理学教授）、久保田義顕（慶應義塾大学医学部解剖学教授）、中原仁（慶應義塾大学医学部内科学（神経）教授）、本田賢也（慶應義塾大学医学部微生物学・免疫学教授）、審良静男（大阪大学WPI免疫学フロンティア研究センター特任教授）、清水孝雄（国立研究開発法人国立国際医療研究センター脂質シグナリングプロジェクト長）、高橋淑子（京都大学大学院理学研究科生物科学専攻教授）、田中啓二（公益財団法人東京都医学総合研究所理事長）、永井良三（自治医科大学学長）、野田哲生（公益財団法人がん研究会代表理事・常務理事がん研究所所長）、柳沢正史（筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IIIS）教授）】

濡木 理（ぬれき おさむ）博士

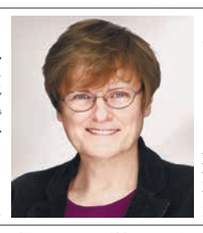
東京大学大学院理学系研究科教授

授賞研究テーマ：生命活動において重要な機能分子の構造生物学的研究

構造生物学は生体高分子の立体構造を解析する生物学の一分野であり、近年、創薬においても非常に有用な手法となっています。濡木博士はこの構造生物学を駆使し、tRNA修飾酵素を含む各種RNA・タンパク質複合体、さらには各種膜輸送体などの立体構造を世界に先駆けて解明してきました。これらの一貫した研究を通じ、構造生物学の手法を単なる分子の構造決定だけではなく、分子の機能の解明に迫れることを明示し、21世紀の生命科学の大きな潮流のひとつたらしめた点は紛れもなく濡木博士の功績と言えます。近年では、ゲノム編集の基盤となるCRISPR-Cas9の立体構造を世界で初めて解明し、『ゲノム編集創薬』の道を切り拓きました。このように濡木博士は、生命科学研究に新しいパラダイムを切り開くとともに創薬においても革新的な展開をもたらしており、今後のさらなる発展が期待され、慶應医学賞の受賞にふさわしいものと考えます。

Katalin Karikó（カタリン カリコ）博士

ペンシルベニア大学客員教授／BioNTech SE社 上席副社長



授賞研究テーマ：メッセンジャーRNAワクチン開発につながる基礎研究

メッセンジャーRNA（mRNA）はDNAに書かれた遺伝情報をもとにタンパク質が合成される際の中間体として働きます。カタリン・カリコ博士は1980年代から、人工合成したmRNAを医薬品化できると考えました。しかし、合成mRNAを細胞に導入すると強い炎症反応が起こります。カリコ博士は15年の歳月をかけ、mRNAを構成する物質の一つであるウリジンをシュードウリジンに置き換えることでこの免疫反応を回避でき、さらに、合成タンパク質量も増加することを明らかにしました。これらの発見は、現在、新型コロナウイルスのワクチンとして世界中で使用されている「mRNAワクチン」開発の基盤を提供しました。このように、mRNAワクチンはCOVID-19のみならず、各種感染症に対するワクチン開発に革新をもたらしており、カリコ博士の業績は慶應医学賞にふさわしいと考えられます。

●医学部長就任の挨拶

格致日新 ―次の100年に繋ぐ―

医学部長　金井 隆典（67回）

この度、2021年8月1日より医学部長に就任いたしました。医学部長として、これからの2年間の所信を述べさせていただきます。

慶應愛：私はこの4カ月、医学部の多くの皆様とお話をすることができました。その中で、皆様が慶應医学を愛し、この医学部が素晴らしいグループであり続けることを切に願っていることを強く実感しました。皆様は実に多様な問題意識と未来像をお持ちですが、皆、慶應愛に根差した同じ方角に向いていることを改めて再認識しました。今、医学部長に求められる責務は、こうした多様な問題意識や未来像を、短期・中長期的に、さらに優先順位を決めて、一本にまとめ、社中協力して事業を展開し、慶應医学の価値をより一層高めていくことだと思います。

対話：そのためにも、私は医学部で働く一人一人と対話し、皆様の声をしっかり聴き、医学部の現状・将来像の共通理解を醸成することから始めたいと思います。そして、何よりも、重要課題の情報開示を通じ、開かれた医学部を運営していきたいと思っています。

学費軽減：皆様との対話を通じて、特に切実な課題として痛感しましたのは、学費問題です。歴代の医学部長が常に取り上げ、跳ね返されてきた難題に対して、私は粘り強く挑戦します。具体策として、塾熱行部への理解、安定的な病院収益、プロフィットを生む知財、奨学金制度の拡充、銀行ローンのサポート、塾員・三四会・企業を巻き込んだ基金の創設、医学部の備品・光熱費・外注費の節約等を粘り強く取り組み、着実に学費軽減を実現していきます。一方、教学、研究環境の改善など、拡充するべき課題はしっかり断行していきます。

若手の息吹：もう一つ、力を入れたいことがあります。私は、若い世代の息吹を強く感じられる医学部にしていきたいと考えています。多くの若手・中堅の研究者や臨床医が、研究費の確保、育児、研究環境、過重労働、ワークバランス、将来への不安等で疲弊しています。慶應義塾の未来を支えてくれる彼らの夢、その実現こそが、慶應義塾の財産であります。激変する近い将来で、慶應医学の若手・中堅が一層活躍できる環境を提供したいと考えています。無論、これらの改善策にも財源が必要です。若手研究者の人材育成のための大型助成金の獲得に注力します。

常にポジティブに、難題に向かって挑戦し続ける姿勢を常に示しながら、この医学部を牽引していきたいです。何卒、皆様からのご支援のほどお願い申し上げます。

●病院長就任の挨拶

大学病院長を拝命して

病院長　松本 守雄（65回）

この度、2021年9月1日付けで大学病院長を拝命いたしました。大変光栄であるとともに、重責に身の引き締まる思いであります。慶應義塾大学病院は昨年開院100年を迎えましたが、記念すべき年に新型コロナウイルス感染症による深刻なダメージを受けました。その後、教職員が一丸となり、感染制御にとり組むとともに、大学病院としての責務である高度医療の提供に努め、東京2020オリンピック・パラリンピックへの医療対応も行いながら、病院機能の復興に邁進してきました。今後も、新型コロナ感染の波を乗り越えながら「次の発展」への新たなフェーズへと歩を進めて参ります。

まずは特定機能病院としての必須の要件である医療の安全と質の向上に努めつつ、患者の方々にご信頼いただける病院の構築に努めます。臨床研究中核病院として、建学以来の精神であります基礎臨床一体型の先進的臨床研究・治験を遂行するとともに、AIホスピタルモデル病院、がんゲノム医療中核拠点病院として次世代の医療を展開し、その果実を多くの患者の方々に享受していただけるアカデミックホスピタルを目指して参ります。大学病院は医・薬・看の医療人育成の場でもあります。将来の医療の担い手を数多く受け入れ、関連病院とも協働して病院基本理念である「豊かな人間性と深い知性を有する医療人」を育成することも重要です。タスクシフト・シェアやチーム医療、デジタル化の推進などにより働き方改革を進め、医師にとってもメディカルスタッフにとっても働きやすい、また働きがいのある職場環境を整えていきたいと思います。病院運営においては、前方・後方連携をしっかりと推進し、三四会の先生方の御施設とも丁寧かつ密接な連携を進めて参ります。各診療科・部門、そして職種の皆様とは真摯に話し合いを重ね、ご意見を伺いながら病院運営上のハードルを一つ一つ越えていきたいと思います。

今回選任された新任、重任3名ずつ計6名の副病院長、および新任2名、重任1名、計3名の病院長補佐の皆さんと協働しながら、北川雄光、天谷雅行両常任理事、金井隆典医学部長とも連携を密にし、法人・医学部との三位一体の体制で慶應義塾大学病院の発展のために努力を重ねたいと思います。来年春にはエントランス棟・外構整備が完成し、グランドオープンを迎える新病院において慶應ならではの高度医療を展開して参りますので、よろしくご支援・ご指導のほどお願い申し上げます。

●大学院医学研究科委員長就任の挨拶

大学院医学研究科委員長を拝命して

大学院医学研究科委員長　柚﨑 通介（64相当）

この度、岡野教授の後任として大学院医学研究科委員長を拝命致しました。大変光栄であると同時に重責に身が引き締まる思いです。

大学院医学研究科は、これまでに基礎・臨床・社会医学分野で研究者や教育者として各分野で活躍されている人材を数多く生み出してきました。特に21世紀COEの獲得を契機に博士課程の学生定員が増員され、以後も順調に医学研究科は発展してきていると思います。ただし、発展を持続するためにはどのような組織も常にリノベーションが必要です。良いところを維持し（Renewal）、問題点は修復し（Repair）、さらに必要に応じた改編（Remodel）が必要と考えています。今期は新進気鋭の研究者であり、若手研究者の育成に貢献されている佐藤俊朗教授（坂口記念講座・オルガノイド医学）、田中謙二教授（先端医科学研究所・脳科学）に医学研究科委員長補佐をお願いし、学生や研究者の養成に熱心な井上浩義教授（化学）、吉村昭彦教授（微生物学免疫学）に医学研究科学習指導委員をお願いいたしました。さらに多くの先生方に大学院検討委員会委員として、大学院のさまざまな課題の検討をお願いしています。

例えば医学研究は医学部出身者のみではできません。一定の割合で他学部出身者を積極的に受け入れて異分野を融合していくことが重要と考えます。このためには修士課程との連動がとりわけ必要となります。同時に、医学研究には医学部出身者が必須です。門川俊明・教育担当副医学部長や塩見春彦・研究担当副医学部長と連携して学部教育、特にMD-PhDコースとの連動を進めていきたいと考えています。

また、近年、大学や大学院に対して、産業界と連携を強化することによる科学技術イノベーションの創出という役割が強く求められるようになりました。あらゆる学問の究極の目的が、人類の幸福の実現にある以上、これは当然の流れと考えます。一方で、小泉信三第七代慶應義塾長は「すぐに役に立つことは、すぐに役に立たなくなる」との有名な言葉を残されています。本当に役立つ、パラダイム破壊的なイノベーションを生み出すためには、研究領域を越えて共鳴を招くための創造の場が必須であることが分かっています。中村雅也・産学連携担当副医学部長と連携して、医学研究科の教室を越え、さらに国内外の研究室や産業界との壁を越えた「共鳴場」の仕掛けを作ることによって、長く役に立つイノベーションを生み出していく礎を作っていきたいと思っています。

皆様にご指導いただきつつ金井隆典医学部長をはじめとする執行部の皆様とともに、3つのRからなるリノベーションの舵取りを行っていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

鑑定知来

日本はいつのまにか科学技術先進国から後進国になりつつある。しかも、後進の科学技術すら生活のなかに届いていない。

新型コロナウイルスのパンデミックで、そんな日本の現状が明らかになったと思う。ワクチンや治療薬の開発ひとつをとっても然り。とくに生活のなかで顕著になったのは、ICT導入の遅れだ。

シンガポールでは、筆者のような長期滞在許可証を持つ外国人にも「マイナンバー」に相当するID番号が割り振られている。ID番号による個人認証はデジタル化されており、新型コロナウイルスワクチンの接種予約はこれを使ってスマートフォンで5分足らずで済んだ。接種完了証明や海外で通用する「ワクチンパスポート」もすべてオンラインだ。ちなみに日本のワクチンパスポートは紙だ。

コンタクト・トレーシングのアプリも人口の9割以上に普及する。スーパーやレストランなど様々な公共の場の入り口にQRコードが掲げてあり、アプリでスキャンしないと入れない。アプリにより、感染者の濃厚接触者の割り出しがオンラインで素早くできる。

オンライン教育への切り替えもスムーズに行われた。これまでのICT導入の蓄積がコロナ下で最大限にいかされており、「先進国に住んでいる」と感じる。

10月初旬、シンガポールの新規感染者数は1日2千人を超え、日本より多い。しかし、実際に発生している感染がほぼ漏れなく把握されており、98%は無症状か軽症だ。政府は経済活動再開に向けて切った舵を逆方向に戻すことはなく、微調整で進めている。

日本も、ICT導入の遅れを早急に取り戻すべきだ。その際、デジタル化したマイナンバーを普及し、医療や納税、年金などの情報と一元化するべきだと考える。

コロナの時代は、個人と社会の関係、そして漠然とした世間ではなく、同時代に生きるわれわれのソサイエティ（連帯）を考え直すいい機会だ。

（シンガポール　国立大学教授　須田年生　53相当）